全介協会長が現地リポート

未曽有の大災害から約2カ月。いまだ孤立した高齢者の姿を多く見かける。本紙コラム「介護ガイド帳」の上原喜光氏（全国介護者支援協議会会長）が、被災地の現状をリポートする。

大マスコミが報じない被災老人ホームの実態

連休前、全介協のスタッフ6人、仙台支部の応援4人の計10人で、4トン車を含む5台のトラックで宮城県内の老人施設を回ってきました。

うちの会員でもある「アルバジャパン」から寄贈された車いす50台と、練馬区から託された紙おむつ、毛布など段ボール820個分の義援物資を届けるためです。

南三陸町には冷たい雨が降っていた。車内から広がる光景は、延々と木くず、鉄くず。テレビで見るのとはまるで違う。胸が張り裂けそうになってきます。

野次馬は論外ですが、ある側面、この荒涼たる光景を東京の人も目に焼き付けておくべきかもしれません。なぜなら、首都直下型地震も、〝いずれ来る〟からです。その時の心構えです。

我々が回った大崎市、栗原市、登米市……は海沿いではありません。そのため、この場所は大新聞やテレビからほとんど無視された格好です。

しかし、高齢者が本当に闘っている場所とは、実はこういう山側の土地なのです。施設を流された要介護者が大勢移り、4人部屋は、畳を10枚ほど積み上げたベッドで5人、6人部屋になっていた。床に寝かせてもいいが、介助の位置が低いと、看護師やヘルパーさんがすぐ腰を痛めてしまうからです。中古でいいから、介護ベッドが必要です。さらに、食事の詰まりを防ぐ「トロミ剤」も不足しています。

また、現地で問題になっていたのが、救援物資を入れていた段ボール。善意の残り物ですが、今はただのゴミ。すべて持ち帰るのが鉄則です。トイレは、土を掘っただけの穴でした。

避難所に行った際、「ここを出ようか」と相談している認知症の親を抱える家族と出会いました。「迷惑だから出ていってほしい」と言われたそうです。確かに奇声を上げたり、深夜徘徊もある。被災から1カ月ほどは我慢できた周囲も、体が疲れ、余震に悩まされれば、〝いたわり〟の心が薄らいで当然です。

だからといって、老人ホームはすぐに見つからない。車で寝泊まりすることになる。テレビが伝える「頑張れ」だけではないのです。

東京や大阪の人が今すぐできることも見えてきました。簡易トイレ、尿漏れパッド、先ほどのトロミ剤も備蓄は必須。さらに重要なのは、防災訓練です。9月1日は「防災の日」ですが、ほとんどの人は消防車で放水ショーをやる日ぐらいにしか思っていないでしょう。町ごと、マンション組合ごとに定期的に訓練すれば、自治体が後生大事に備蓄している乾パンや角砂糖への疑問も浮かぶはず。「もっとおいしい食料にしよう」という提案も出てくるでしょう。

「認知症は迷惑だから出ていけ」の声も

地震は必ず来ます。東北の被災地には救援物資を、逆に東京の人は救援物資に頼らなくてもいい準備をすべきです。

全介協支援先一覧

①養護老人ホーム松寿園 ☎022・382・3535
②グループホームふかふか・はうす ☎0229・87・1350
③特養老人ホームいちょうの里 ☎0228・22・7887
④特養老人ホーム若藤園 ☎0228・32・5601
⑤老健施設高森ロマンホーム ☎0228・22・3922
⑥老健施設グレイスガーデン ☎0228・32・7730
⑦南方ナーシングホーム翔裕園 ☎0220・58・5455
⑧老健施設清風 ☎0224・22・2110
⑨老健施設リハビリパークさくら ☎0224・58・3300
⑩南三陸町社会福祉協議会 リバーサイドアリーナ